

男は空をただただ眺めていた。

空には雲がところどころに浮かんでいて程度で、煌めく星々を見ることは別段難しいことではなかった。

もつとも、その男は星座観測に勤しんでいるというわけでもないようだ。

どれくらいの間、空を眺めていたのか、男は窓を乱暴に閉じた。

振り向くと、そこにはデスクがある。たくさんの書物が山積みになっていた。いくつものホロディスプレイが、ちらちらと瞬いてる。

男が椅子に座ると、ぎしぎしと軋んだ音を立てる。

そして、男は俯き、大きな溜息をつく。

「足りない……」

消え入るような声で、男は呟いた。

大変落ち着いた雰囲気であったが、彼は内心焦っていた。

時間がないのだ。期限は刻々と迫りつつある。期限までに成すべきことがあった。しかし、それを達成するためには、様々なものが欠落していた。

男は再び、窓の外を見遣った。

流石に日付が変わる頃になれば、遠くに見えるオフィス街の高層ビル群も明かりを完全に落としている。

航空障害燈がビーコンのごとく、赤く瞬くだけだ。

表の大通りに、行き交う車も人影もない。街路燈が煌々と照っているだけである。

辺りは静まり返り、もの寂しさがそこにはあった。

寂しいのが嫌であれば、繁華街へ行けばよい。そこならば不夜城だ。寂しさや不安を嫌う人間が集まっている。幾ばくかの金と引き換えに、一時であるが寂しさや不安を慰めてくれるし、忘れさせてくれる。

だが、男の持つ不安や焦りといったものは、そんなもので解消するはずはない。

顔をしかめながら、彼は部屋を後にした。

廊下の電気もほとんどが落とされているため、薄暗かった。歩を進めるたびに、かつんかつんと足音が響く。

少し身震いするような空気を、気にする素振りも見せず、彼は速い足取りで進んでいった。

男が向かった先は、広々とした地下室であつた。広々としているだけで、何も無い空間である。殺風景であつた。床も天井も、灰色のコンクリートで無機的に塗り固められている。

ここを訪れた人間は第一に寒々とした印象を思えるであらう。スポーツ広場というわけでもない。倉庫というわけでもない。

事情がわからない人間は、一体何を目的とした空間なのかと疑問を抱くだろう。

男は部屋を中心に立ち、深呼吸を繰り返した。焦りを少しでも落ち着かせるために。

「正しき日は近い。それまでに必ず……」

彼は眩き、そして、目を細める。

どこにも焦点を合わせず、あたかも虚空を見透かすような目だ。

「もう少し、お持ちくださいませ。偉大なる主よ」

彼はしばらく、その場で立ち尽くしたままであつた。

次元航行部のオフィスで、フェイトは忙しなくキーボードを叩いていた。ペースを落とすことなく、淡々とキーを叩いていく。

その打鍵がふっと止まった。そして、少し考えた後、再び打鍵を開始する。

書類作りであった。先日解決したばかりの事件の報告書、と言うより証拠品の目録であった。

地味な事件であった。よくある密輸業者の摘発だ。

不正な輸出品として押収したものは、大量の高純度の魔力結晶であった。

魔力結晶は産業の米である。輸出入に際しては関税を掛けられ、関税率の掛け方がいれば次元世界間での通商問題となる。

つい先日にもミッドチルダ政府は、カルナログに本社を置く複数の魔力結晶メーカーに対して、ダンピングを理由とした制裁関税を掛けることを発表し、カルナログ政府と被制裁企業が撤回を求めた。各世界の産業の基盤を成すだけであって、各世界の政府はそれらの

取り扱いに非常に神経質になっているのが現状だ。

関税を嫌っての密輸がしばしばなされる。

ロストロギアの密輸を担う組織と比べれば、この摘発した組織は可愛いものである。構成員のほとんどは逮捕したし、物品も押収した。

しかし、万事解決したというわけでもなかった。

輸出先・輸入先やそのルートが闇に完全に包まれていた。

このような組織を摘発すれば、後は芋づる式にルートや関係組織に到達できる。だが、根気よく調査しても、全容の解明は遅々として進まなかったのである。

輸出先も巧妙に偽装されたペーパーカンパニーであった。

たかが魔力結晶の密輸で、ここまで巧妙な偽装をしているのは珍しい。

「まるで、ロストロギアね」

フェイトは人知れず独語した。

ロストロギアでないことは判明している。どこからどう検査しても単なる魔力結晶であった。

ただ、摘発組織は扱っている品物がまるでロストロギアであるかのように、嚴重かつ巧妙な偽装をしていた。

そこまでして嚴重にやるものか。いくら高純度の魔力結晶が普通の魔力結晶より高関税

を掛けられるからといって、ここまで手間隙を掛けてしまうとコストがメリットを上回る。素直に正規の手続きに乗っ取ったほうが、輸出元も輸入先も安上がりなはずだ。

目的は？ ルートは？ いやに不明な点が多い。

キーボードを叩く手が再び止まる。

単なる密輸にしては、腑に落ちない点が多い。それが、たびたびフェイトの手を止まらせた。

フェイトは立ち上がり、部屋を後にした。

今ここでうだうだと考えていても仕方がない。

気分転換だ。

事務仕事で凝った肩をほぐしながら、リフレッシュスペースへと向かう。

自販機で缶コーヒーを買った。業者が補充したばかりか、まだ冷たくなかった。中途半端なぬるさのコーヒーほど不味いものはない。

だが、買ってしまったからには飲まないと損である。

「フェイト」

ちびちびと飲んでいると、にわかに残ろから名前を呼ばれた。

ちらりと振り向くと、クロノの姿があった。

「お疲れ様、調子はどうか？」

まずまず、とフェイトは答えた。

クロノも自販機の前に立ち、フェイトと同じ銘柄のコーヒーを買おうとする。

「あ、それ、冷たくないよ」

言うのがわずかに遅かった。既にボタンは押した後であった。

クロノは吐き出された缶を手にとって、眉間に皺を寄せた。

渋々といった表情で、彼もコーヒーを飲み始める。

「そっちのほうは？」

フェイトの質問に、クロノは首を横に振って、

「あんまりだ。末端を取り調べても、いいものは出てこないな」

「やっぱり、頭を抑えないね」

「そのとおりだ」

そう言って、クロノは一気にコーヒーを飲み干した。

トップは事前に手入れを察知したのか、姿を眩ましたのである。逮捕できたのは事情をよく把握していない五人の構成員だけであった。

おそらくはトップは元締め組織からの出向みたいな役割であろう。

トップの補佐的な人物は逮捕できたが、全てを把握しているわけではない。

「連中は尻尾だ。彼らを調べ上げても、多分大本に辿り着けない」

そう言うクロノの顔は苦々しい。

クロノもフェイトと同様にこの密輸事件の不可解な点が気になっていた。

もつとも躍起になって、全容を解明する必要もない。密輸を事前に防いだ功績で、充分である。管理局の本務は古代遺産の管理であるのだ。魔力結晶の密輸事件にかまけている暇はそれほどない。

「大本は何だと思う」

「わからない。魔力工業が裏で糸を引いているとは思えない。ここまで我々や税関の目を盗む必要はない」

「でも、大量の魔力結晶を必要とするところなんて、魔力工業以外考えにくいね」

「そうだな。個人で魔力炉を作ろうとしているのなら別になる」

フェイトが思わず笑う。

「個人で魔力炉を動かしたら、目立って仕方がないわね。そんな目立つことをしたら、とつくに局の管理下に入っているよ」

「可能性として言ってみただけだ。——後で調書の清書も頼む。目録のほうは？」

「ほとんど終わってるよ。今日中には出せるかな。それにしても、あんなたくさんの結晶、何に使うんだろう」

「こつちも知りたいよ。連中もよくわからないらしい。下っ端は完全に道具扱いだ。でも、



このままで行くしかないだろう。今週中には仕上げたい」

報告書を提出して、捜査を終了したいという意味だ。フェイトはクロノの意向に賛同するかのよう頷いた。

「わかった」

「最後の担当事件になるだろうからな。きっちりやってくれよ」

フェイトは少しむっとして、

「それって、私が普段からしつかりやっていないように聞こえるんだけど」

「いつもより、さらにしつかりやってくれという意味だ」

フェイトの抗議にクロノが慌てて弁解する。

先月、フェイトは執務官試験に無事に合格した。二度落第して、三度目の受験で合格。

三度目の正直というやつだ。

しかし、未だに昇進辞令は下っていない。未だにフェイトの肩書きは「執務官補」であって、「執務官」ではないのである。

今月の末に辞令が下り、晴れて執務官に昇進する。

おそらくはアースラから異動する。一つの艦に二人の執務官を置くことはほとんどない。来月からは、新しい職場が待っている。そこに籍を置きながら、三ヶ月の研修を受けることになる。それ以降、正式に執務官として働くことになるのだ。

アースラクルーとして、その執務官補として担当することになる最後の事件となるだろう。

正式に入局したのが、九歳の頃であったから、四年間アースラに籍を置いたことになる。慣れた職場を離れるのは寂しいし、それに不安もあった。

できれば、アースラにずっと乗っていたい。そのような気持ちも当然あった。

フェイトは様々な負の感情が胸の中で渦巻き始めた。整った顔にかすかに不安の色が走った。

「やっぱり、不安か？」

「正直、それはある。でも、こんなことで不安になってちゃ仕方がないよ」

フェイトは笑った。異動を悪く捉えてしまえば終わりだ。前向きに取り組まねば。

フェイトは残っているコーヒを一気に流し込んだ。

すつと立ち上がって、缶をゴミ箱に放り込む。それに倣うかのように、クロノも空になった缶を捨てた。

小休憩は終了だ。

二人は肩を並べて歩きながら、オフィスへと戻っていった。

今日の仕事を終え、フェイトは夕食のために局の食堂に来ていた。終日、無限書庫で書架整理を手伝っていたアルフもいる。

普段ならばリンデイがいるから、わざわざここで摂る必要はないのであるが、彼女は出張だとかで今夜は家にいないのである。

時間帯が時間帯だけに混雑しており、喧騒と熱気に満ち溢れている。

トレイを持ちながら、空席を探す。

端のテーブルに、仲良くトレイを並べているシグナムとヴィータの姿があった。ちょうどよいことに、席が開いている。

そのテーブルに近付くと、シグナムが真っ先に気がついた。

「テストロツサカ」

フェイトはにっこりと笑って、

「こんばんは。席、大丈夫かな」

「ああ、構わない」

シグナムに促されて、二人とも席につく。

「家で摂らないのか？」

「今日は母さんが出張なんだ。そっちもはやてがないの？」

「一昨日から任務で一週間ほど留守にされている」

「そう言えば、そうだったね」

フェイトは、はやてが一週間学校を休むと言っていたことを思い出した。

「はやてがいないから、シヤマルが飯を作ることになるんだ。だから、ここに来ているんだよ。ここの飯も、あんまり美味くはないんだけど、シヤマルが作るのと比べりゃあ、ずつとましだ」

ヴィータが無然とした表情で言った。まともな食事を作る人間が家にしばらくいないので、仕方なく食堂に来ているというわけだ。

「それなら仕方がないね」

フェイトが微笑しながら、ヴィータに同意した。シヤマルに大分辛く当たっているのが、食事の不味さだけはフェイトも認めなければならぬ、厳然たる事実であった。

「普段ならば、シヤマルが時々作るという具合なんだが、一週間も奴の飯を食うとなると……」

シグナムが言葉を濁すと、ヴィータがしれつと言った。

「気が狂うな」

「そこまで不味いのかい？」

さつきまで食事に集中していたアルフが突っ込む。アルフもザフィーラ経由でそのこと知っているのであるが、ここまで貶されているのに、我慢できずに突っ込んだ形だ。

「アルフは食ったことがないから、どうとでも言えるんだよ。いいか？ 焼き魚と言って、魚の形をした炭を出されてみる」

「芯の残ったご飯なんか序の口だな」

「どうやったたら、醤油と天つゆ間違えるんだよ」

ヴィータとシグナムが力説する。

フェイトとアルフは曖昧な笑顔で時折頷きながら聞いていたが、急に表情を固くした。だが、愚痴をこぼすのに熱心な二人は、その表情の変化に気がつかない。

数分に渡る愚痴が終わると、シグナムがフェイトらの固い表情にようやく気がつく。

「どうした？ 変な顔をして……」

フェイトは声を絞り出しながら、背後の存在を指摘する。

「あの、後ろ……」

「うん？」

同時に振り返ったシグナムとヴィータが、口をあんどぐりと開けた。その瞬間、二人はバインドで否定なしに拘束される。

「シグナム。ヴィータちゃん。どっちがいいかしらあ？」

同姓ですら見とれるような、まるで天使を思わせる笑顔のシャマルが立っていた。

だが、彼女から放たれる怒気、いや殺気は歴戦の猛者でも背筋がぞっとするほど強烈な

ものである。

指輪とクラールヴィントの水晶をつなぐワイヤーが、二人の首に巻きついた。また、二人の胸の前に旅の鏡が展開された。

クラールヴィントのワイヤーで首を絞められたいのか。リンカコアーを抜き取ってほしいのか。どちらかを選べということであった。

「シヤマルよ。いつから……」

シグナムが上擦った声で言う。シヤマルは首を少し傾げながら、

「うーん、ヴィータちゃんが『醤油と天つゆを間違えた』と言ったあたりね」

シグナムとヴィータが何故もつと早く言わないとフェイトに無言で抗議する。フェイトは心の中で詫びた。怖ろしい殺気を放つシヤマルを前に、とてもではないが抗うことはできなかったのだ。

(シヤマルさんって、実は最強なんじゃないのかな……)

そのような考えが頭の中を過ぎる。

確かにシグナムにヴィータという二人の騎士に気付かれることもなくその背後を取り、数分間気配を殺していたのだ。

シグナムと度々模擬戦を行っているフェイトであるが、感付かれることなく背後を取ったことなどあまりない。

シグナムに加え、ヴィータにも気付かれないで背後を取れということなど、夢のまた夢だ。

「えっと、今日は、さっさと帰るんじゃないかなかったのか。リインは放つといていいのか」  
ヴィータが震えた声で言った。

「だって、二人とも今日は仕事が遅くなるから、ご飯は要らないと言ったじゃない。それにリインフォースちゃんは『今日はコンビ二弁当を食べる。コンビ二弁当がどうしても食べたい』と頑として譲らないし……。自分のためだけに作るのは寂しいしから、ここで食べようと思って来てみたからねえ」

両名が自分の料理の愚痴で大いに盛り上がっていたところに出くわしたということである。

「さあ、二人とも、どっちがいい？」

そう訊かれても、どっちがいいとは返答できるわけがない。二人とも沈黙せざるを得ないのだ。

「じゃあ、リンカーコアでいいわね。大丈夫、抜き取りは勘弁してあげる。ちよつと弄るだけだから」

抜き取ると二人ともしばらくは戦力外となるので、流石にそれはまずいと判断したのであろう。シャマルなりの優しさだ。

ただ、リンカーコアを抜き取られるのはもちろんのこと、単に弄られるだけでも相当痛い。フェイトも息ができないほどの激痛は知っている。思い出すだけで痛くなるほどだ。

「捕まえた」

シグナムの胸から右手が、ヴィータの胸から左手が生えてきた。両手には輝くリンカーコアがしっかりと握られている。

実に手馴れたものである。

そして、シャマルはリンカーコアを適当に遊び始めた。

二人とも声にならない悲鳴を上げる。

「テストロツサちゃん」

二人のリンカーコアを弄りながら、笑顔で名前を呼ぶ。

フェイトは思わず背筋を伸ばす。

「あのね、確かに私の料理の腕はまだただけど、二人とも大袈裟に言っているだけだから、真に受けちゃ駄目よ」

フェイトはただただ無言で頷くしかできなかった。

二人の仕置きが済んだところで、シャマルはようやく席についた。

気がつけば、周りの席は空いている。他の局員達が遠目から明らかに警戒の、いや怖れの眼差しを向けていた。



フェイトがふつと目を合わせると、周りは慌てて視線を逸らした。

当然と言えば、当然であろう。

「そうそう、最近、変な患者さんが多いのよね」

シヤマルがフォークでパスタを掻き廻しながら言った。

「変な患者？」

フェイトが首を傾げる

「そう。悪夢を毎晩見るだとか、そういった人」

「でも、悪い夢って続くことが多いですね」

二年前のことを思い出した。なのはが落ちたときであった。

あのときは毎晩悪い夢を見ていたと思う。起きるたびに、それが正夢ではないかと、びくびくしていたし、夢と現実の区別が曖昧な感覚に陥ったこともしばしばあった。

夢というのは大概自分の周りに起きていることが、素地となつていてというのが、フェイトの考えでもあった。

「来る人全員、同じような夢なのよ」

「奇妙な話だな。集団ヒステリーみたいなものか？」

シグナムが横槍を入れる。ヴィータとアルフは難しい話になるのを察したのか、それを傍目に黙々と食べ物をお口に運んでいる。